●緩和ケア病棟で闘病・臨終した妻の枕頭で詠める歌　二〇一八年六月

死に近き妻を看取りつ想い出ず　小川にしじみ取る小３の彼女

死に近き老妻の顔いと愛（いと）し　８０年生きししわの深さよ

死に近きことも忘れて語り次ぐ　教師時代の楽しきことども

初孫が高校教師になりたる日　小躍りしたる妻の輝き

人体の詳しき知識披露する　小６の孫娘（こ）に目を丸くする妻

ハイタッチする小４の孫娘　心癒され手を合わす妻

緑濃きサンルームの風景愛でる妻　森の向こうの我が家恋いつつ

「死にたいよ　死なせてよ」とせがむ妻　なすすべもなくただ胸さする

「長い間有難う　元気でね」と　わが手握りて絞り出す言葉

若菜（娘）呼び思いのたけを語りし夜　老妻は逝けり心おきなく

死に近き夜はしんしんと更け行けり　妻の寝顔を幾たび撫でる

朝明けの臨終の妻抱きしめば　まだほのかなる体温残る

（朝六時過ぎ、病院からの呼び出し、娘らと急行するも意識なし）

臨終の妻の寝顔に駆けめぐる　この闘病の幾星霜

老妻の遺体にすがり泣く子らの　姿は悲し妻の臨終

「穏やかな最期でした」と言いし看護師（ひと）目を赤くして我が身気遣う

医師ナース勢ぞろいして妻送る　井田病院の緑も黙す